

報 会

特 集 号

No. 9

昭和42年9月10日

静岡県公立高等学校 PTA会長連絡会

盛会きわめた総会

—平塚先生を迎えて—



(講演中の平塚先生)

昭和42年度の総会は6月22日静岡市日興会館で開催され、多数の会員を迎え、盛会をきわめた。新役員に会長藤森常次郎(二俣)、副会長に中野東三(吉原工)、北村精一(静岡城北)、河合多三(浜名)が選任され、理事17名、監事3名が決定し

た。世話人は田方地区・木村一郎(熱海)、田駿地区・杉村守彦(沼津東)、富士地区・中野東三(吉原工)、静岡地区・北村精一(静岡城北)、志穂地区・秋田八平(島商)、小笠周智地区・内田貞男(掛川西)、磐田地区・藤森常次郎(二俣)、浜松浜名引佐地区・河合多三(浜名)、特殊学校鈴木行雄(沼津南)後に賀茂地区小川清五郎(下田南)が決定した。

新年度事業として、特に学校視察と分科会研修を加え、生徒割負担金10円となった。

本年は特に、元ユネスコ国際教育局長としてバリーにおいて活躍され、現在国立教育研究所長であり、中教審第二十特別委員会主査として高校教育の拡充整備にも重要な役割をはたされ、我国教育界の第一人者である平

塚益徳博士を迎え、「世界の日本の教育」と題する実に有益な講演をうかがい、二百余を教える参会者は非常な感銘をうけた。

行事記録 (昭和42年度)

- 5・1 沖繩教育施政離分難返還に関する陳情書提出
- 5・9 監査会、理事会
- 5 昭和41年度会計監査、昭和42年度運営方針、総会準備表彰候補者詮衡等
- 5・24 全国高P協理事會
- 6・22 総会
- 昭和41年度事業、決算報告、昭和42年度役員選出
- 昭和42年度運営方針事業計画、予算案審議
- 研修「世界の中の日本の教育」講師平塚益徳先生懇談会
- 7・5 東海四県高校PTA連絡協議会(於岐阜市)
- 8・9 全国高P理事會及総会
- 8・10・11 第17回全国大会(於東京)
- 表彰 松井謙一(沼津東高校) 織田清(静岡農業高校)
- 9・10 会報(特集号)発行

第十七回全国大会開かる

8月10～11日 於・東京文化会館



○織田 清
中野 東三
藤森常次郎
河辺 二郎
○松井謙一
〔表彰記念〕

全国高P協議会の全組織をあげて、高校教育振興のため、先ず高校教育課の新設と定数法の改正を要望して猛運動をつづけてきたが、宿願が叶えられ、よるこびと希望にあふれた第十七回大会は八月十日から上野公園の東京文化会館に文部大臣を迎えて盛大に開催された。本県より藤森会長外十四名参加、高校振興について功労者として本県

は、松井謙一（沼津東高校）織田清（静岡農業高校）の両氏が晴の表彰をうけられた。これより先、八月九日、東京文化会館において第四十九回理事會及び第十七回総会が開催され、藤森理事、中野代議員がそれぞれ出席した。大会第一日、佐藤首相のメッセージに、国政の重点を青少年の健全育成におくと強調された

ことは注目をひいた。大学入試改善は本県提出の議題であったが、内藤顧問よりは、あいさつの中に、入試改善の急務を強調され、魂なき日本の繁栄に歴史教育を再考すべきだと熱論された。午後、三分科会に別れ、1、教育制度に関するもの、2、教育財政に関するもの、3、生徒指導、PTAに関するもの

について熱心に討議された。第一分科会においては藤森会長より大学入試改善につき提案され賛成を得た。第三分科会には、高校教育課長石川二郎氏が助言者として臨席された。石川課長は静岡県出身であり、高P連の要望にこたえて新設された初代の課長だけに期待するところが多い。この分科会では、山梨県の挙県一致の高校生指導の実態が発表され、特に高P連事務局長が県高教組副委員長であることでもわかるように、教組と高Pとの協調、生徒側の生活指導要綱の自主規制など他県でも羨むほどの実績に感激の波動を呼んだ。

分科会後、上野精養軒で懇親

会が開かれた。沖繩の教育施政権分離返還に関する陳情書を本県でも県下各高校PTAの協力を得て提出してあったが、この運動に対し、懇親会の席上、沖繩代表の声涙ともにくだるあいさつがあり、今更のように戦後二十年、忘れてならない重大な処理事項の残っていることに悲壮な連帯感をひしひしと感じさせられた。

大会第二日、八月十一日は、各分科会の報告、協議決議等があり、山口虎夫会長等新役員を紹介あいさつがあり、盛会且有意義の中に終了した。

第三回欧米高校教育事情視察団募集

期間 昭和43年10月12日～11月5日
経費 58万8千円（普通は73万円位）

資格 全国公立高校PTA連絡協議会会員とその家族の方のみ

申込マ切日 昭和43年3月31日
ご希望の方は募集要項をさしあげますから至急県高P事務局へお申込下さい。

世界の中の日本の教育



世界の教育の動向

国立教育研究所長

平塚益徳

私は時間の許す限り、私の今考えているこれからの日本の教育に関する根本問題について、皆様方に申し上げるというよりも、むしろ訴えさせていただくという気持ちでこれからの時間を活用させていただきたいと思えます。

まず第一に申し上げたいことは、人類の長い歴史の中で、今日の時代ほど人類が一つになって教育ということを根本に考え始めた時代はないということです。

世界には国が百三〇余りあります。これらの国で先進国家が二〇ちよっと、後進国家、いわゆる開発されつつある国が八〇以上、この中間に約二〇ばかり、こういう分布になっています。

ここで私のはっきり申し上げることができるのは、これらの三つ

のグループのどの国をとりあげても、その国の現在の一番大きな問題が教育でないという国はないということです。こういう時代は今までありませんでした。特に注意したいことは、後進国家群が教育に対して非常な熱意を示しているということです。

私は先日、佐藤総理に、アメリカ、ドイツ、フランス、それにイギリスなどの例をあげて、よほど日本がこの際しっかりしないとたいへんなことになる、具体的な数字を示して申し上げました。佐藤総理も深くお考えのようでした。

わが国は教育を尊重していると言いますが、もっと教育に対するお金のかけ方を真剣に考えなければならぬと思います。世界の国々で一番軍備にお金をかけていないのが日本です。アメリカは国費の四割以上、イギリスが三割台、日本は一割以下です。ではその軍備に使っていない金をどこに使用しているかということが問題です。

が、これは国民全部が反省しなければならぬのですが、どこかに無駄があるわけです。

私はほとんど毎年、外国の大学に招かれて日本の教育についての講義に行っています。昨年は南米リマのサンマルコス大学に、今年はいギリスに参りました。私は、それらの機会を通じて世界の国々がどんなに教育に対して熱心であるかということを目のあたりに見てきました。現在の世界は教育の爆発の時代だということばが世界的にいわれております。私は個人として爆発ということばはきらいですが、とにかく各国は、国、社会、そしていろいろな団体として全部が教育に対し水準を高めるか改革するというか、非常に熱心な努力を積み重ねているのです。こういう驚くべき爆発的な現象が何故おこったかということをごく簡単に申し上げます。

第一の理由は人口の激増ということです。例外は日本だけです。昨年の太平洋学術会議で、これからのアジアの人口の激増にどう対処するかということが会議の最大の問題になりました。現状では食糧がまにあわないという深刻な問題、一番最初に生きる問題がすでに迫っているのです。インドでは毎年何百万という人が餓死あるいは栄養失調に直面しているのです。しかし、それ以上に世界の教育を非常に大きく動かしているのは、この人口の激増に教育が対処しなければならなくなっているからです。

第二は、デモクラシーの原理が各国をおおっているということです。一口で申し上げると、どんな人間にも、階級、宗教、地位、身分、財および男女の差を問わず、すべての人間に教育を与えるべきだと

いうこと、教育の機会均等という原理です。この原理によって世界各国においての教育のあり方が反省されているのです。

後進国家は、宗教、地位、身分、経済あるいは男女の差によって教育を与えなかったということが長い間続いていたのです。その結果、現在でも人類の中に七億からの完全文盲者がいるのです。こういうことは今申した教育の民主化という原理から考えて、非常に残念なことです。この反省が後進国家をして教育に力を注ぎ始めさせております。

南米各国では小学校への就学率が平均四割台でした。これを高めるために、一九五七年一月にラテンアメリカの二〇か国が協同して教育水準向上のための運動を開始し、アジアでは一九六一年の一月からユネスコ参加の一八か国（現在一九）が協同して教育的努力を始めました。この底辺にある人たちに教育を与えるための努力は、先進国家においても同じであります。教育が一番進んでいるというアメリカでも教育の民主化という問題で強い反省がなされています

アメリカの教育に対する反省

その第一点は、黒人に対する教育を平等にするという運動です。南部に行くときほど不平等で、歴代の大統領はいつでもこのことは正を考慮してきましたが、頑迷な南部の人がいつも拒否していました。ところが一九六三年六月、歴代大統領がどうしてもできないことを青年大統領ケネディーが断行したのです。ケネディーは南部の頑迷な州、そして最後までたてついたらアラバマ州に対して、軍隊を動員

してまで黒人の学生の入学を拒んだアラバマ大学に反省を求め、とうとう六月一三日に解決をつけました。私はこれだけでもケネデーは偉かったと思います。同年の一月に彼は暗殺されましたが、私はあとでドイツのハンブルグに行つてびっくりしました。彼の計報が伝つた時ハンブルグ大学の数千の学生がその死を惜んで大デモンストレーションをしたそうです。私はこの事實は自分の國をほんとうによくしようとするための努力が、外国の人にも共感をもつて迎えられたという真理を示したものと考えております。

次に民主主義ということでアメリカが第二番目に反省したことは育英制度を確立しようとしていたこと、アメリカは州によって育英制度の發達した州とそうでない州があつたのですが、連邦政府はアメリカ全体をレベルアップするための政策をとりました。

これが一九五八年九月の国家防衛教育法の中に見事に出ております。アメリカにおける第三の反省点は、民主主義はただやたらに學校を作るといふことではないということです。いたずらに多くの學校を作つて多くの学生をどしどし入れるということ、——これをもつて民主主義の原理が果たされると考えることは非常に危険な形式主義だといふ反省です。

ここでアメリカの學校教育が世界の中でどういふ地位を占めてゐるかといふことを再検討します。一八才以上を高等教育としますと、アメリカでは現在高等教育の就学率は三五パーセントを突破しました。これは高率です。フランスが一・二パーセント、ドイツが一〇パーセント以下です。それから中等教育、日本でいう新制高校の段階は、アメリカではすでに九五パーセント「すべての者に中等教

育を」というスローガンが一九三〇年代のアメリカの教育界の目標でありましたが、現在九五パーセントになつてゐるのです。ただしこの中で二〇ないし二五パーセントの者は途中でドロップアウトしますが、以上二つの点からみても、アメリカは世界で中等ならびに高等教育の最も發達した国だといえるわけです。ところが最近のアメリカの反省はこれだけでは本當の教育ができないという反省です。學校のあり方が生徒の要求とマッチしてゐるかという問題、つまり形だけ學校にはいり、形式的に卒業しても決して民主主義の實現ではないという反省です。ここに中等教育ならびに高等教育の多様化といふことがでてくるのです。

これはわが國にも参考になると思ひますが、今までアメリカは多様化をやらなすぎたということです。逆にイギリス、フランス、ドイツは中学校の段階で多様化しすぎたので、その分化する時期を遅らせようとしてゐるのです。

これはわが國の例ですが、高校への進学率は七五パーセントに迫り、非常な勢いで上昇しています。ところが高校の普通課程の在學生の実態を調査したところ、高校で提供されてゐる教科をじゅうぶん身につけて卒業してゐる諸君は、推定ですが三〇パーセント台、しかもこれらの中に足踏みしてゐる優秀な生徒もおるのです。もつと教えてやれば、もつといろいろと身につくはずの子どもたちです。要するに形式的なのです。次に最初から全然ついていけないのが約二〇パーセント、残りは五〇パーセントですが、これも二分されるのです。一つのグループは、自分で勉強してやつていくのです。夜おそくまでやらなければついていけない。あとのグループは

独力ではとうていいけないので、家庭教師とかいろいろな形で他から助けてもらう。現在中学、高等学校の段階で家庭教師や塾がはやっていますが、これは学校教育そのものが不健全か、教育そのものがどうかしているからです。しかも御注意いただきたいのはこの優秀な諸君の中から二〇パーセントが高等教育機関にはいるわけですが、はいつた途端に息が切れてしまう。大学にはいつたら人生の目的の半分以上は達したと考えられがちだからです。

わが国では大学生の自殺、ノイローゼ、そして留年の率が非常に高いというゆゆしい問題が昨今論議的になっていますが、アメリカはこういう問題を反省して、大学入試の問題も能研的なものにするとか、内申書をじゅうぶん尊重するとか、いろいろな形で形式的なあり方をなくし、子どもたちの能力、適性を開発しようと努力しております。しかもこういうことが本当の民主主義であるという認識に達していることを御留意いただきたいのです。

イギリスの教育

私は一九五六年にイギリスにまいり、帰朝して一番最初に静岡県の小、中、高等学校の先生に、ヨーロッパにおける道徳教育というつたない講義をさせていただきました。パンフレットになって県教育委員会から出ています。私はその時はっきりと世界でイギリスの道徳教育はたいしたものだと申しました。私は今でもそう思っています。ただし、イギリスは学校教育制度となると非常に不健全です。私はイギリスの大学で申しましたが、私たちにとって不健全

議なくらい、教育制度であなただの国は非民主的な要素を残しすぎていのではないかと、この点でイギリスは現在、特に労働党が政権を担当してからの学校制度を民主化するために努力をいたしております。そして二つの方向を出しております。

一つは、中等教育で従来早く将来の方向を分けるという方法を反省し始めたことです。驚くなけれ一才でイギリスは分けているのですが、こんなに早くから進路を分けるということに対する反省です。少なくとも二年あるいは四年、一般的教育をもうすこしやってみようという考え方です。これが有名なコンプリヘンシブ・スクールの根本の考え方です。

第二は、階層的な背景での制約がありすぎることの反省です。この階層的な制約をゆるめて人材を高等教育機関により多く吸収しようとし、特に工学関係の研究を大いに発達させようという努力を大わらわらになってやっています。

イギリスでは一九六三年一〇月に有名な二つのレポートが出ました。ニューザム報告書という前期中等教育の改革のための報告書、それに、ロビンズという高等教育の改革のための報告書です。そして今年の一月には、初等教育の改革のためのブラウデン報告書が出ました。あのおとりとしたイギリスが、一九六三年以後、非常に国民的努力で従来の教育制度のあり方を反省しているのです。

この反省の方向は、わが国にとって必ずしも参考になりませんがアメリカの考え方と相照して、是非フランスから多くのものを学びとっていただきたいのです。

フランスの教育

私は今までフランスの教育を客観的に調べて、その考え方や方なりに対して心から共鳴しています。

第一は、フランスぐらい教育の世界で一人一人をたいせつにする制度を確立している国はありません。これはなんととってもフランスから学ばなければなりません。

第二は、教育改革が学問を基礎としているということですが。単なる政治家の思いつきでなく、積み重ねの学問の上に、教育の改革の根本の路線がいつでもしかれようとしているのです。

第三は、一人一人を大事にするといいますが、単なるアトム的な個人ではなく、国というものを忘れていません。個人と国家ないし国民の見事な調和です。私は特にこの点を学びたいのですが、個人を尊重するということが、その個人がよき国民であるということが前提であるというこの調和、これは現在のフランスの大きな光といってもよいでしょう。

第四は、フランスの国民のもっている特色をじゅうぶんにいかす教育の制度を考えていこうとする点です。

フランスは小学校が六才で始まり五か年で終わります。この五年間に何を教えるかという点と算数で特に國語をしっかりと教えます。フランス人は自分の國の國語をたいせつにする国民はあります。そのフランスの教育改革をバックアップしたのがドゴールです。

このバックアップによりベルトロンという文部大臣が、有名な

改革案を一九五九年の一月の議会で通過させました。そこでは今申した算数や國語など基礎的な教科をじゅうぶんに教えるのですが、たいせつなことは、この時期に一人一人の子どもの特色を観察し、その観察を背景にそれに続く前期中等学校の段階で五つの方向に向かわせるのです。皆様が、それではイギリスと同じではないかという疑問をもたれることと思いますが、イギリスの場合はその方向づけが従来決定的であったのに対し、フランスの場合は、あくまで仮の形で、大きく文科的、理科的、さらに長期、短期と分け、最初の二年間で、子どもたちの特性、能力、興味を科学的に観察するのです。しかもこの二年の観察課程だけでは足りないというので、一九六四年の四月に更に二か年の指導課程を続け、合計四か年間、ちょうどわが國の中学校の段階の時によく子どもたちの適性、能力、興味を調べて、最初の二か年間に進路を三回変えることを許すという徹底した個別的指導が行なわれるのです。

こうした方法はスカンジナビアの三国にも採用されました。教育の世界で若干ライバルの關係にあるドイツが、この制度を採用することを考え、真剣に検討し始めました。イギリスも同じです。この観察課程は、ヨーロッパにおいてはこれから先あたりまえのことになるでしょう。中教審で私たちは、この観察課程を真剣に考えるべきであると答申したのも、これが世界のまちがいない方向だと確信したからであります。

そこで、これから世界の民主主義教育のあり方を検討しながら、わが國のあり方を皆様と共に考えていきたいと思います。

フランスでは、小学校で五年、前期中等学校の四年を終って一番

早く社会に出る子どもは、あと一年勉強し、計一〇年で社会に出ます。これがフランスで一番早い課程で、これを完結課程と言います。ところが子どもたちはわが国と違いむしろ自信をもって社会に出ます。父兄もむしろ安心して、また先生も良心的にその子どもたちが社会に出て行くのを見守っています。この事実とその理由を見極めなければ、フランスの教育は理解できないでしょう。

なぜこういうことが可能か、わが国ではこういうことをすれば、不平等だとか、民主主義に反する、子どもを早く社会に出すとはけしからんとか、いろいろな形で非難攻撃されるでしょう。ところがなぜフランスでこういうことが大きな問題にならないか、その理由を考えると、少なくとも三つあるように思えるのです。

第一は、学校だけが教育の場所でないという考え方がフランスの社会に浸透しているということです。これは非常に大事な考え方で、フランスは社会教育のことを永久教育といっています。昨年ユネスコの総会でこれからの世界はライフ・ロング・エデュケーション、生涯をかけての教育を打ち出そうということを決議しましたが、私は心から賛成して手を挙げました。これは決して学校教育を無視するものではありません。その点、日本ぐらい社会教育を学校教育のさしみのつまと考えている国はありません。イギリスは継続教育（ファーザーエデュケーション）と言いますが、私は継続教育も結構だと思いますが、フランスの永久教育の方がよいと思います。事実音楽の学校で有名なパリのコンセルバトワールは入学者の学歴を問わず、また、ソルボンヌに対抗するコレージュ・ド・フランスには、買物かごを手にした婦人が自分のよしとする講義を聞くという

ことが一般に許されているのです。またそこでの碩学たちによる名講義は、ラジオでもって一般社会に流されています。

次はフランス人の人生観の問題になりますが、人間の能力は、知識だけが能力でないという考え方です。私はたいへん残念に思っているのですが、わが国ほど知識だけが能力だと考えすぎている国はありません。アメリカもこれに若干近いが、日本ほど極端ではありません。これは中教審の答申にもはっきり書かせていただきましたが、人間の能力は、もちろん、知識も能力の一つですが、技術、技能、芸術、社会的能力——これは非常にたいせつな能力で、ちょうどテレビのおはんはんみたいな能力です。人を生かすということ、その人によってほかの人が生かされるというのは知識ではなく社会的能力です。最後は、身体的能力、からだ、です。

先ほど一九五九年のベルトワン教育改革案（ドゴール改革案）について述べましたが、それ以前にもフランスにはいくつかの改革案がありました。その中でも一九四七年六月のランジュバン教育改革案、これはブルー・プリントで実施にはいたりませんでした。教育学の上では世界で最も模範的な改革案だと言われています。

この改革案には六つの基本的な原理がありますが、その第四原理は、ランジュバン先生のことばをそのまま用いますと、人間の価値という原理においては、知的能力も身体的能力も同じだという原理です。

私はこの原理は非常にたいせつな考え方であると思います。これはランジュバンが考えたのではなく、長いヨーロッパの伝統だと思います。ここでミレーの「晩鐘」を思い出していただきたいと思

ます。あの絵は、どんなに世界の人から人生の幸福の一つの象徴とされていることか、ミレーの伝記を書いたロマンローランはミレーは後世の人に教訓を垂れるためにその絵を描いたのではなく、彼自身が農村において実際あの姿を見たのだ。そこで感動のあまり、絵筆に表わしたのだと申しております。だから私たちに切々としてあの絵の中に含まれた精神、あるいは表現された生活態度が、万人の胸をさすのです。畑でその妻と共に生産的な一日働きを終えて、家路につく時、感謝の祈りをささげる。そこに人生の意義があるのだというこの考え方、これはフランス人の能力感とならんで、その職業観にも通ずるわけです。

エリートとエクセレント

次にアメリカのガードナー博士の考え方、この人は日本の文部大臣にあたる方で、この人の呼びかけについてここでふれてみたい。

このガードナー氏は、りっぱな学者で、昨年アメリカの重要な教育の学界で記念の講演をされました。その内容はエクセレンシーという問題についてです。どういふことかと言いますと、エリートという考え方はいけないということ、民主主義にはエリートという教育はありえないということです。よく日本でアメリカはエリートの教育を始めたと言いますが、エリートの教育ではないということ、彼がはつきり言い、一冊の注目すべき本になっているのです。

エリートという場合には、どうしても他の人を見下すという考えが出てしまい、その概念の中には価値の差がはいってしまふのです。アメリカの教育はエクセレント *Excellent* を考える。エリートは見

下すと同時に知的要素がはいるので、エクセレンシーとなるといろいろな形のエクセレントがあるわけです。(他の人々をも幸福にする能力) 先日NHKの朝のテレビ「旅路」で、ある老駅長さんが鉄道には、保線係といった鉄路の状態を実に詳しく知り、調べているたいせつな人々がいて、ちょっとした故障、不調もすぐ見つけ出し、そのため列車が安全に運行されているのだ。ところがその駅長さんの知人に一生保線夫として、神様に近いように路線のことに詳しい人がいるそうした人こそ社会にとつてたいせつな人ののだ。という話が出てきましたが、ガードナー氏のいうエクセレンシー(卓越)ということはこのことなのです。どんな職場にもそれはあり尊重されなければなりません。

日本人くらい能力のある国民はありません。日本の子どもは素質がすぐれています。知識だけでなく手先も器用です。こういう子どもたちを大事に、それぞれの子どもの将来の方向において、社会的役割をじゅうぶんに果たしうるように、それぞれの使命をもつて働くという、そういうことを教育の世界でまず位置づけなければなりません。先生方、父兄方、否、日本人全部がみんな一緒になって考えていただきたいのです。いろいろな意味で、現在の日本の教育の世界は暗い面がありますが、しかし、ありがたいことにもがしっかりとれているのですから、それこそしっかりと教育で、りっぱな日本人を、アジアの各国から、否、世界中の人々からも頼りにされるような日本人の育成に、心を一にして努力したいものだと思から願ってやみません。